

我が国のユネスコ活動について

(平成28年8月～平成29年2月)



平成29年2月



日本ユネスコ国内委員会

Japanese National Commission for UNESCO

本報告は、平成 28 年 8 月から平成 29 年 2 月までの活動を中心に記述しています。
また、密接に関連するものについては、日本ユネスコ国内委員会以外の活動も記述
しています。報告書中に記載のある所属・職名は在籍時のものを示しています。

目 次

<TOPICS>

「山・鉾・屋台行事」、無形文化遺産に登録	1
岡山 ESD フォーラム 2017 の開催	2
子ども霞が関見学デー「日本ユネスコ国内委員会トークショー」	3
「ESD 活動支援センター」の開設	4
持続可能な開発目標(SDGs)推進特別分科会の設置・開催	4

<日本ユネスコ国内委員会活動報告>

教育分野における取組	5
科学分野における取組	8
政府間海洋学委員会 (IOC)	8
国際水文学計画 (IHP)	9
人間と生物圏 (MAB) 計画	9
ユネスコ世界ジオパーク	11
文化分野における取組	12
世界文化遺産	12
世界自然遺産	12
各国との交流	13

<民間ユネスコ活動>

公益社団法人日本ユネスコ協会連盟	14
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)	29

<日本ユネスコ国内委員会に関する参考資料>

国際会議等一覧	41
ユネスコ関係者来日一覧	42
国内委員会会議	43
国内委員会委員人事	43
国内委員会事務局人事異動	44
本年度・来年度の委託事業及び補助事業	45
日本／ユネスコパートナーシップ事業	45
ユネスコ活動費補助金	48
政府開発援助ユネスコ活動費補助金	49
日本ユネスコ国内委員会後援名義一覧	50
ユネスコスクール新規加盟校一覧	50

「山・鉾・屋台行事」、無形文化遺産に登録

ユネスコ無形文化遺産保護条約第 11 回政府間委員会

平成 28(2016)年 11 月 28 日～12 月 2 日、エチオピアのアディスアベバにおいて第 11 回政府間委員会が開催され、11 月 30 日(水)(20 時 02 分〔日本時間 12 月 1 日(木)2 時 02 分〕)に、我が国から提案していた「山・鉾・屋台行事」のユネスコ無形文化遺産登録(代表一覧表記載)が決定されました。これにより、我が国の無形文化遺産は 21 件となり、世界全体での登録件数は 366 件となりました。

「山・鉾・屋台行事」は、平成 23(2009)年に無形文化遺産に登録された「京都祇園祭の屋台行事」と「日立風流物」に、国指定重要無形民俗文化財である 31 件の全国の山・鉾・屋台行事を追加し、拡張登録されたものです。

「山・鉾・屋台行事」の構成(33件)

行事名	府県名	行事名	府県名
八戸三社大祭の山車行事	青森県	尾張津島天王祭の車楽舟行事	愛知県
角館祭りのやま行事	秋田県	知立の山車文楽とからくり	愛知県
土崎神明社祭の曳山行事	秋田県	犬山祭の車山行事	愛知県
花輪祭の屋台行事	秋田県	亀崎潮干祭の山車行事	愛知県
新庄まつりの山車行事	山形県	須成祭の車楽船行事と神葎流し	愛知県
日立風流物	茨城県	鳥出神社の鯨船行事	三重県
烏山の山あげ行事	栃木県	上野天神祭のダンジリ行事	三重県
鹿沼今宮神社祭の屋台行事	栃木県	桑名石取祭の祭車行事	三重県
秩父祭の屋台行事と神楽	埼玉県	長浜曳山祭の曳山行事	滋賀県
川越氷川祭の山車行事	埼玉県	京都祇園祭の山鉾行事	京都府
佐原の山車行事	千葉県	博多祇園山笠行事	福岡県
高岡御車山祭の御車山行事	富山県	戸畑祇園大山笠行事	福岡県
魚津のタテモン行事	富山県	唐津くんちの曳山行事	佐賀県
城端神明宮祭の曳山行事	富山県	八代妙見祭の神幸行事	熊本県
青柏祭の曳山行事	石川県	日田祇園の曳山行事	大分県
高山祭の屋台行事	岐阜県		
古川祭の起し太鼓・屋台行事	岐阜県		
大垣祭の軸行事	岐阜県		



京都祇園祭の屋台行事



日立風流物



高山祭の屋台行事



秩父祭の屋台行事と神楽

岡山 ESD フォーラム 2017 の開催

我が国の財政支援により、2015年にユネスコに創設された「ユネスコ／日本 ESD 賞」は、世界中の ESD の実践者にとってより良い取組に挑戦する動機付けと、優れた取組を世界中に広めることを目的として、世界各国から推薦された ESD の実践から、毎年3件のプロジェクトを選び表彰するものです。

2016年には、岡山 ESD 推進協議会による「岡山 ESD プロジェクト」が受賞案件の一つに選ばれ、これを記念して、2017年1月22日(日)に、「岡山 ESD フォーラム 2017」が岡山市で開催されました。本フォーラムの開催にあたっては、ユネスコ本部とも協力し、①好事例の共有、②受賞者間の連携促進、③ユネスコ／日本 ESD 賞の知名度向上、を図るため、世界各国から歴代受賞者5名が一堂に会する機会を設けるとともに、ユネスコ本部職員や、日本ユネスコ国内委員会が実施しているフェローシッププログラム参加者(アジア太平洋地域5カ国のユネスコ国内委員会事務局職員)も共に一部プログラムに参加しました。本フォーラムの参加者は、岡山 ESD プロジェクトの実施機関でもある岡山市内のユネスコスクールや公民館への視察を通じて、我が国における ESD の実践に触れました。

また、本賞の受賞者は、東京都内に所在する ESD に関するグローバル・アクション・プログラム(GAP)キーパートナー(後述)への訪問、東京都内の ESD ステークホルダーとの対話や、受賞者間で ESD の評価、ユースの活用や今後の連携等について議論を行い、「ユネスコ／日本 ESD 賞」の今後の推進方策についての意見交換を行いました。



ユネスコ／日本ESD賞歴代受賞者の日本ユネスコ国内委員会事務局訪問

子ども霞が関見学デー「日本ユネスコ国内委員会トークショー」

平成28年7月28日（木）、子ども霞が関見学デーにおいて、日本ユネスコ国内委員会広報大使であるさかなクン、平野啓子さん、日本ユネスコ国内委員会 IOC（ユネスコ政府間海洋学委員会）分科会調査委員である道田豊先生をお招きし、「日本ユネスコ国内委員会トークショー」を開催しました。

第一部の平野啓子さんによる「語りと朗読」では、芥川龍之介の「蜘蛛の糸」、芥川龍之介の手紙が披露され、美しい言葉を通して、言葉の持つ力や、人の想いは過去から現在、現在から未来へとつながっていくことについて考えるプログラムとなりました。

第二部のさかなクンと道田豊先生による「ESD×IOC トークショー」では、IOCの活動や魚を取り巻く海の環境について、実際の写真やイラストを見ながら、わかりやすい説明がありました。人間が海にごみを捨てると、魚がそれを食べて弱ってしまったり、死んでしまったりするという話を例えに、海・川・山などの自然にたくさん触れる機会のある夏休みに、自然環境の素晴らしさや守っていくことの大切さについて参加者たちが考える機会となりました。また、さかなクンがイラストを描きながら出題するお魚クイズでは、それぞれの魚の特徴を聞きながら、子供たちが積極的に手を挙げて発言し、ESDについて楽しく学ぶことができました。

今回のイベントは、ユネスコにおける教育、科学、文化分野の様々な要素を含んだ試みで、それぞれの分野を互いに結びつけながら学べる企画となり、来場者も昨年に引き続き300人以上となりました。当日の様子は文部科学省 YouTube チャンネルでも配信されています。

このほか、子ども霞が関見学デーにおけるユネスコ活動関連のイベントとしては、7月27日（水）、28日（木）の2日間にわたって、日本ユネスコエコパークネットワーク（JBRN）がブースを出展し、ユネスコエコパーク7地域及び候補地2地域から取り寄せた「森のかげら」を使用した工作体験イベントが開催されました。



「日本ユネスコ国内委員会トークショー」の様子



環境省 ESD キャラクター「はぐくん」

「ESD 活動支援センター」の開設

「我が国における『持続可能な開発のための教育(ESD)に関するグローバル・アクション・プログラム(GAP)』実施計画」(2016年3月、ESDに関する関係省庁連絡会議決定)では、ESD活動に取り組む様々な主体が参画、連携し、地域活動拠点の形成とともに、地域が必要とする取組支援や情報・経験を共有できる「ESD活動支援センター」の整備や、地域の実態を踏まえてその効果的な運用を目指す「全国的なESD支援のためのネットワーク機能の体制整備」について記載しています。本ネットワークは、文部科学省と環境省が共同提案した、持続可能な社会の実現に向け、ESDにまつわる様々な関係者が、地域における取組を核としつつ、様々なレベルで分野横断的に協働・連携してESDを推進することを目的としたネットワークです。

本ネットワークの形成に向けて、2016年4月には、本ネットワークの核としてESD活動の支援に取り組む「ESD活動支援センター」が東京都渋谷区表参道に開設されました。本センターの具体的活動としては、2016年11月に、全国において幅広くESDの実践を行う185名の参加者が出席して「ESD推進ネットワーク全国フォーラム2016」が開催されるとともに、本フォーラムや、地域のESDに関する活動取材し記事にすることを目的に公募から選ばれた「社会人ユースESDレポーター」による「若者世代によるESD情報発信プロジェクト」が実施されています。また、2017年度には、全国8か所で、地方ESD活動支援センター(仮称)の整備が予定されております。

こうした取組を通じて、これまでの教育分野におけるESDの知見を生かしつつ、環境教育等に取り組む民間団体等の知見を学校現場で活用するなど、分野を横断した連携協力が推進されることが期待されます。

持続可能な開発目標(SDGs)推進特別分科会の設置・開催

2015年9月に開催された国連サミットにおいて持続可能な開発目標(SDGs)が全会一致で採択されたことを受け、日本では、我が国としてSDGsの実施に率先して取り組むべく、2016年5月に安倍総理を本部長とするSDGs推進本部が設置され、同年12月にSDGs実施指針が決定されました。

さらに、日本ユネスコ国内委員会においては、ユネスコが教育分野の主導機関となっており、教育、科学技術、文化等に関する計9つのゴールにおいてもユネスコが重要な役割を果たすことが示されたことを受け、2016年7月に、SDGs推進特別分科会を設置し、現在、SDGsの実現に向け、教育、科学技術、文化等の分野において、ユネスコ活動を通じて国内外で貢献するための方策について審議を行っています。

日本ユネスコ国内委員会活動報告

教育分野における取組

第2回 GAP パートナーネットワーク会合への出席

ユネスコ本部では、ESD に関するグローバル・アクション・プログラム(GAP)の推進を進める上で中心的な役割を果たす 80 の機関を、「GAP キーパートナー」として指定しており、GAP の5つの優先行動分野ごとに、キーパートナーによるネットワーク(GAP パートナーネットワーク)を形成しています。文部科学省／日本ユネスコ国内委員会は、「優先行動分野1・政策的支援」のネットワークメンバーに加わっていることから、2016 年7月にユネスコ本部で開催された、全ての GAP キーパートナーが一堂に会する第2回 GAP キーパートナーネットワーク会合に参加しました。

本会合では、GAP の中間年である 2017 年3月にカナダ・オタワで開催予定の「GAP レビューフォーラム」に向けて、GAP パートナーネットワークごとに今後の連携方策等について議論が行われるとともに、ユネスコ本部からは、GAP のレビューに関する調査についての説明がありました。

ユネスコー日本 ESD 関係者との非公式意見交換会

2016 年 11 月、ユネスコ本部教育局において ESD を担当する、スー・ヒャン・チョイ部長及びアレクサンダー・ライヒト課長等の来日に合わせ、日本の ESD 関係者との間で、今後の ESD の推進に関する非公式意見交換会が実施されました。意見交換会においては、日本側からは、学校現場、教育委員会関係者、NPO、学識経験者等、17名のステークホルダーが集まり、ESD が公教育で果たすべき役割や、ESD の推進方策を検討する上での ICT の活用、今後の ESD の推進等について、議論が行われました。ユネスコ本部では、こうした非公式意見交換等を行う中で、2019 年の GAP 最終年も見据えながら、今後の ESD 推進方策についての検討を行っていく予定です。

SDG4(教育)の推進

第2回 SDGー教育 2030 ステアリング・コミッティー

2015 年9月の持続可能な開発目標(SDGs)策定以降、SDGs で掲げられた 17 の目標については、それぞれの分野において、その推進方策の検討が進んでいます。このうち教育については、SDGs の目標4の中で 10 のターゲットが定められています。ユネスコ本部が事務局を務める「SDGー教育 2030 ステアリング・コミッティー」において国際的な推進方策の検討が進められており、我が国からは、吉田和浩・広島大学教授が、本コミッティーの副議長として参加しています。昨年12月に開催された第2回ステアリング・コミッティーには、吉田教授とともに日本ユネスコ国内委員会事務局からも参加し、各地域における教育分野における SDGs の実施状況や指標についての議論が行われるとともに、更なる推進方策を検討する中で、ロードマップの策定に関するグループの設置などが提案されました。

第2回アジア太平洋地域教育 2030 会合(APMED2030 II)

ユネスコのアジア太平洋地域において、教育分野を総括する地域事務所であるユネスコ・バンコク事務所では、SDGs の教育に関する目標達成のため、2015 年 11 月にユネスコを中心とする国連機関及び各加盟国で採択された「教育 2030 行動枠組」の実施方策について議論することを目的に、2016 年 11 月、日本からの信託基金も活用し、「第2回アジア太平洋地域教育 2030 会合」を開催しました。我が国からは、前述の SDGー教育 2030 ステアリング・コミッティーの吉田副議長(広島大学教授)と日本ユネスコ国内委員会事務局から出席し、SDGs の教育分野におけるテーマごとのワークショップに出席し、各国国内委員会事務局等と、各国の実施状況について情報交換を行いました。

ESD のネットワークづくり

第3回 ESD 日本ユース・コンファレンス

平成 28 年 10 月 22 日(土)～23 日(日)に岡山市において、第3回 ESD 日本ユース・コンファレンスが開催されました。2014 年に「ESD に関するユネスコ世界会議」の一環として岡山市で開催されたユネスコ ESD ユース・コンファレンスから2年が経過し、ちょうどこのコンファレンスの直前に岡山 ESD プロジェクトの第2回ユネスコ/日本 ESD 賞受賞に湧く岡山での開催となりました。

全国で ESD を実践する 18～35 歳の 45 名が、この2日間で出会い、つながり、そしてコラボレーションするという企画になっており、1日目は参加者自身の ESD との出会いやこれまでやってきたこととその課題、どんなことに貢献できるかについて発表し合い、ミニワークショップやピアラーニングなどを通じて相互理解を図りました。2日目は、各自が今回出会った仲間とどんなコラボレーションができるか、実際にチームを組んで企画を練るというプログラムで、熱い議論が展開されました。

コンファレンス終了後は、岡山 ESD 推進協議会の協力により、岡山市で ESD に取り組んでいる学生(高校生や大学生)、教員、行政官、民間団体関係者とユース・コンファレンス参加者が交流を図り、それぞれの取組について紹介し合いながらネットワークをさらに広げることができました。

本コンファレンスのフォローアップ会合として、本年1月 28 日には都内において ESD 日本ユース・プラットフォーム会合が開催され、過去のユース・コンファレンス参加者やその関係者が集い、コンファレンスで立ち上がったプロジェクトについて発表し合い、課題や今後の方向性などを話し合いました。

なお、ユース・コンファレンスもプラットフォーム会合も、Twitter や Facebook、Ustream などの SNS を積極的に活用し、オンラインを通じた ESD ユースの発信の場にもなっており、コンファレンス終了後も SNS 上での活発な交流や情報共有、意見交換が続いています。



コンファレンス参加者との記念撮影

第8回ユネスコスクール全国大会

平成 28 年 12 月 3 日、第8回ユネスコスクール全国大会ー持続可能な開発のための教育(ESD)研究大会が金沢大学で開催されました。開会式には松野博文(当時)文部科学大臣、安西祐一郎(当時)日本ユネスコ国内委員会会長、山崎光悦(当時)金沢大学学長、そして来賓として馳浩(当時)前文部科学大臣が出席しました。

挨拶の中で松野大臣は、ユネスコスクールがこれまで ESD の推進拠点として、特色ある様々な取組を展開してきたことを踏まえ、本大会が国内外の取組の共有と発信の場となり、さらには新しい時代を拓いていくための有意義な機会となることを期待していると語りました。また、安西会長からは、日頃から様々な取組を実践しているユネスコスクールの関係者に対する御礼と全国大会が持続可能な未来を創造するための新たなアイデアが広がる場となることへの期待の言葉がありました。

今回の全国大会では、平成 28 年1月に開催された日中韓教育大臣会合において、馳前大臣が中国及び韓国の教育大臣に対し本大会へユネスコスクール関係者を招待したことを踏まえ、中韓のユネスコスクール教員を招へいし、各国のユネスコスクールの取組事例の共有を図るためのプログラムが設けられました。馳前大臣は、地元である石川県や金沢市がこれまでも国連大学への拠出金をはじめ、国際的な貢献を果たしてきたことに言及しながら、中韓両国から招へいされた教員を歓迎の意を表しました。

第8回目を迎える本大会へは、全国から教員や企業、行政、NPO等の関係者 635 名が参加し、2014 年に岡山市において「ESD に関するユネスコ世界会議」ステークホルダー会合の一環として開催されたユネスコスクール世界大会を除き、過去最多の参加者数となりました。パネルディスカッションや中国・韓国のユネスコスクール活動事例発表、テーマ別分科会、協力企業による社会貢献活動の紹介や ESD 関連企業・団体による展示などを通し、各参加者がユネスコスクールの活動や ESD に関する様々な課題について情報収集や意見交換をし、活発な議論が繰り広げられました。

なお、中国及び韓国のユネスコスクール教員は、この大会の前日に金沢市内にあるユネスコスクール(小学校と中学校)を訪問し、授業見学や校長をはじめとする日本の教員と意見交換を行い、給食や日本の伝統的な遊びを児童生徒たちと体験するなど、活発な交流の機会となりました。



上:冒頭で挨拶をする松野博文(当時)文部科学大臣と安西祐一郎(当時)日本ユネスコ国内委員会会長

下:パネルディスカッションの様子

科学分野における取組

政府間海洋学委員会 (IOC)

植松 光夫 日本ユネスコ国内委員会委員・IOC 分科会主査の「第9回海洋立国推進功労者表彰」受賞について



植松委員(左)、総理官邸での表彰式にて

平成 28 年8月 25 日、植松 光夫 日本ユネスコ国内委員会委員・IOC 分科会主査・東京大学大気海洋研究所教授が、「第9回海洋立国推進功労者表彰」を受賞されました。植松委員は、海洋環境保護の科学的側面に関する国際専門家会合の委員を務めるなど、海洋分野における日本の国際的地位の向上に貢献されました。

「海洋立国推進功労者表彰」は、文部科学省、農林水産省、経済産業省、国土交通省及び環境省が内閣官房総合海洋政策本部事務局の協力を得て実施しています。平成 20 年より、科学技術、水産、海事、環境など海洋に関する幅広い分野における普及啓発、学術・研究、産業振興等において顕著な功績を挙げた個人・団体を表彰し、その功績をたたえ広く紹介することにより、国民の海洋に関する理解・関心を醸成する契機としています。なお、本表彰は海洋基本法に基づく海洋基本計画にも位置づけられています。

国立研究開発法人海洋研究開発機構 (JAMSTEC) への IOC 活動推進に関する協力依頼について

政府間海洋学委員会 (IOC) 分科会は、国立研究開発法人海洋研究開発機構 (JAMSTEC) に対し、今後も引き続き専門的な観点からの分析・検討を行っていただくため、IOC 活動推進への協力を依頼しました。

世界各地で海洋調査を実施している我が国にとっては、海洋調査が一定のルールのもと、円滑に実施されるよう各国に働きかけを行うこと及び技術移転について議論を行うことができる場として IOC は非常に重要です。IOC の活動分野は海洋観測、海洋情報、海洋環境、海洋法など非常に多岐にわたり、各分野での専門的な検討が求められることから、JAMSTEC において、施策検討の土台となる専門家、有識者による情報収集、意見交換を行っていただき、引き続き、IOC 分科会への支援・協力を頂くこととしています。

国際水文学計画 (IHP)

第 24 回 IHP 東南アジア太平洋地域運営委員会 (RSC)

平成 28 年 10 月 24 日～26 日に、ウランバートル (モンゴル) で第 24 回 IHP 東南アジア太平洋地域運営委員会 (IHP-RSC) が開催されました。本委員会は、立川康人 日本ユネスコ国内委員会委員・IHP 分



IHP-RSC 会議の様子

科会主査が事務局長を務めています。本委員会には14か国の IHP ナショナル・コミッティ代表、ユネスコ・ジャカルタ事務所、水分野のユネスコカテゴリーII センター等から計 50 名以上の参加がありました。各国の IHP 活動の取組状況が報告されるとともに、Catalogue of River 後継事業の検討、IHP トレーニングコースの報告等が行われました。また、MAB やユネスコ世界ジオパークの専門家を招き、IHP とユネスコの各事業間の連携 (MAB、IGGP、MOST、IOC 等) についての議論も行われました。

第 26 回 IHP トレーニングコース

第 26 回ユネスコ国際水文学 (IHP) トレーニングコース「Coastal vulnerability and freshwater discharge」が平成 28 年 11 月 27 日～12 月 10 日の間、名古屋大学宇宙地球環境研究所で開催されました。本プログラムは、名古屋大学宇宙地球環境研究所と京都大学防災研究所水資源環境研究センターとの共催の下、1991 年より毎年実施され、同地域の IHP 事業を担う水分野の専門家の人材育成を行っています。今回のテーマは、沿岸域の環境とそれに密接に関連する地下水や河川による沿岸域の淡水流出であり、生態環境を含めた沿岸域の環境に焦点を当てて、2週間の集中講義・演習が行われました。沿岸域の自然と人間生活の共生も議論され、三重大学が所有する練習船「勢水丸」を用いた海水サンプルの取得と水質分析も演習で実施されました。

人間と生物圏 (MAB) 計画

平成 28 年ユネスコエコパークへの申請地域について

ユネスコが実施する生物圏保存地域 (国内呼称: ユネスコエコパーク) に関して、平成 28 年 8 月 12 日に開催した、日本ユネスコ国内委員会自然科学小委員会人間と生物圏 (MAB) 計画分科会において、「祖母 (そぼ)・傾 (かたむき)・大崩 (おおくえ)」(大分県、宮崎県) 及び「みなかみ」(群馬県、新潟県) を、ユネスコに推薦することを決定しました。



「祖母・傾・大崩」は・大分、宮崎両県に跨がる祖母・傾・大崩山系を中心に、これらを源流とする大野川水系、五ヶ瀬川水系流域の6市町をエリアとしています。地域共通の文化的背景である祖母山信仰や、神楽に代表される土地固有の多彩な民俗芸能が各地で継承されており、自然への畏敬の念が地域の文化として根付いています。

祖母・傾・大崩 御嶽神楽

「みなかみ」は群馬県の最北端に位置するみなかみ町全域を中心に隣接する新潟県(魚沼市、南魚沼市、湯沢町)の一部で構成されており、日本を代表する大河川である利根川の最上流域に位置し、人口・経済において世界最大規模である東京都市圏の約8割、3,000万人の生命とくらしを支える水の最初の一滴を生み出しています。



みなかみ 一ノ倉沢の大岩壁からの清流

昨年9月末には日本ユネスコ国内委員会を通じてユネスコに対して申請書を提出済みであり、平成29年6月にユネスコ本部で開催されるユネスコMAB計画国際調整理事会において、登録の可否が決定される予定です。

祖母・傾・大崩ユネスコエコパーク国内推薦決定記念シンポジウム

本年エコパークとして推薦を決定した「祖母・傾・大崩」において、平成28年11月26日に国内推薦が決定したことを記念したシンポジウムが開催されました。

本シンポジウムは、ユネスコエコパーク(以下、BR)の理念や取組を地域へと浸透させ、普及啓発、登録に向けた一層の機運醸成を図るため、登録予定地域の関係者や地域住民等が中心となって行われたものであり、日本ユネスコ国内委員会自然科学小委員会人間と生物圏(MAB)計画分科会委員である佐藤委員(総合地球環境学研究所)が基調講演を行いました。佐藤委員は、BRでは、地域住民が住む「移行地域」が大事であると前置きした上で、地域がBRに登録された場合に得られるメリットや、BRの活用の仕方等を分かりやすく説明され、BRを活かした地域の持続可能な発展に向けて、少しずつ工夫を重ねていって欲しい、と締めくくられました。



講演を行う佐藤先生

ユネスコ世界ジオパーク

平成 28 年ユネスコ世界ジオパークへの新規申請について(伊豆半島)

ユネスコが実施する「ユネスコ世界ジオパーク」に関して、ユネスコ正式事業化後、日本として初めて、新規申請書が伊豆半島ジオパークより提出されました。

伊豆半島は「南から来た火山の贈りもの」をテーマとして平成 24 年9月に日本ジオパークに認定されました。既存の取組を世界に発信し、新しい挑戦を続けていくために今回ユネスコ世界ジオパークへの申請を行いました。



天窓洞

今後、本年7～8月にユネスコが派遣する現地審査員による現地審査が行われ、9月に中国で、APGN(アジア太平洋ジオパークネットワーク)大会と同時開催されるユネスコ世界ジオパークカウンシル会議での審査を経て、来年春のユネスコ執行委員会にて登録の可否が決定される見込みです。

平成 29 年ユネスコ世界ジオパーク再認定審査に向けて(洞爺湖有珠山、糸魚川、隠岐、島原半島)

ユネスコ世界ジオパークについては、認定後も4年に一度、再認定審査を受け、ユネスコ世界ジオパークとしての活動が十分に行われているかどうか審査が行われます。本年4地域(洞爺湖有珠山、糸魚川、隠岐、島原半島)がユネスコによる再認定審査を受ける予定ですが、それに先立ち昨年10月～11月にナショナル・コミッティとして認証しているJGC(日本ジオパーク委員会)による日本ジオパークとしての再認定審査が行われました。本審査には、日本ユネスコ国内委員会事務局もオブザーバーとして参加しました。

ユネスコでの再認定審査に必要な進捗報告書は本年2月1日にユネスコへ提出し、夏頃にはユネスコが派遣する現地審査員による現地審査が実施され、9月に中国で開催されるAPGN(アジア太平洋ジオパークネットワーク)大会にあわせて開催されるユネスコ世界ジオパークカウンシル会議にて、ユネスコ世界ジオパークとしての再認定の可否が決定される見込みです。



隠岐再認定審査



洞爺湖有珠山再認定審査

文化分野における取組

世界文化遺産

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の推薦

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」については、世界遺産に登録するための推薦書を、平成 28 年 1 月 20 日の閣議了解を経て、ユネスコ世界遺産センターに提出しました。

明年夏頃に開催される第 42 回世界遺産委員会にて世界遺産登録の可否が審議・決定される予定です。



平戸の春日集落(長崎県)
提供:長崎県

世界自然遺産

本年 1 月 20 日、国内5ヶ所目の世界自然遺産を目指して、「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」を世界遺産に推薦することが閣議了解され、ユネスコ事務局に推薦書が提出されました。



世界自然遺産の推薦地と主な固有種

各国との交流

日本ユネスコ国内委員会主催職員交流事業

日本ユネスコ国内委員会では、毎年度、アジア・太平洋諸国のユネスコ国内委員会事務局職員との交流事業を行っています。今回は、中国、韓国、タイ、ネパール、トンガから職員を招へいし、本年1月19日から27日の日程で実施しました。

一行は、1月20日に森本事務総長への表敬訪問を行いました。森本事務総長からは、プログラムの成果を各国の関係者と共有してほしい旨が述べられました。

このほか、各国国内委員会の活動紹介の中で活発な意見交換が行われたほか、岡山で開催された「岡山 ESD フォーラム 2017」への参加やユネスコスクールへの訪問、関連団体への訪問等を通して、日本におけるユネスコ活動への理解が深まりました。



森本日本ユネスコ国内委員会事務
総長への表敬訪問



大森第六中学校での授業見学の
様子



「岡山 ESD フォーラム 2017」にて

民間ユネスコ活動

公益社団法人日本ユネスコ協会連盟

I. 学校関連事業

●みどりの絵コンクール

描くことを通じて子供たちが自然に親しみ、自然の美しさ・大切さを知ってもらうことを趣旨とした絵画コンクールで、第41回となる本コンクールでは、応募総数25,064点の中から、最優秀賞9点、優秀賞34点、入選408点が選出されました。2016年12月10日、表彰式が行われました。〔協力：三菱UFJ環境財団 後援：日本ユネスコ国内委員会〕



日本ユネスコ協会連盟賞「桜島にかかった2つのピンクの虹」

II. ユネスコスクール関連事業

●ユネスコスクールへの活動助成

ユネスコスクールのESD活動支援を目的として助成する、第7期「ユネスコスクールESDアシストプロジェクト」に97校から申請があり、2017年3月3日に審査会が行われます。〔協力：三菱東京UFJ銀行 後援：日本ユネスコ国内委員会〕

●ESD国際交流プログラム

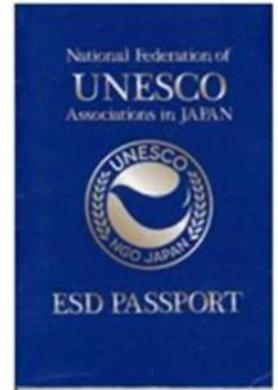
ユネスコスクールと持続可能な開発のための教育（ESD）の普及を目的として2010年度より実施しています。101名の応募者の中から作文等により厳正に選考され、1月下旬に参加高校生12名が確定しました。2017年3月下旬にインドネシアに派遣予定です。インドネシアでは、世界のESDの優良事例を表彰するUNESCO／日本ESD賞を2015年度に受賞したインドネシア・バンドンのESDプロジェクトを訪問するほか、インドネシアのユネスコスクールとの交流も予定しています。〔後援：日本ユネスコ国内委員会〕

●サイエンススクール

「いのちと健康」をテーマに生命や科学への興味とその大切さを学ぶ機会として、2011年より小学校対象の出前授業「サイエンススクール」を実施しています。これまでに全国の62校で実施しました。本年度は2016年6月から12月までの間にユネスコスクールを含む小学校9校で授業を行いました。授業では、身体のメカニズムや薬の発見、科学者たちのルール、軟膏づくりなどを体験し、子供たちが生命や科学に興味を持つきっかけとなりました。〔協力：MSD株式会社、各地ユネスコ協会〕

●ユネスコ協会 ESD パスポート

学校が取り組んでいるESDの相乗効果を高めるために、ユネスコ協会が児童・生徒のボランティア活動を促進する目的で「ユネスコ協会 ESD パスポート」を使用した教育実践を実施しています。本年度は、全国で38のユネスコ協会が地域の学校やユネスコスクールと活動を展開しています。このESDパスポートは、子供たちが地域の課題を主体的にとらえ、解決のために自ら考え、行動する機会を提供し、学校と協働して持続可能な社会づくりと人材育成を目指しています。2016年12月以降、2016年度の体験発表会を各地で行っています。〔後援：日本ユネスコ国内委員会〕



体験発表会の様子

●第3回高校生カンボジア・スタディツアー

2016年8月3日から12日まで全国から選ばれた10名の高校生がカンボジア・ツアーに参加しました。日本ユネスコ協会連盟の坂口一美理事が団長を務め、日本大使館、UNESCO プノンペン事務所、サンボープレイクック遺跡、日ユ協連カンボジア事務所、リエンダイ寺子屋、バイヨン寺院とアンコールワットなどを訪問し、カンボジアの文化、歴史、教育について幅広く学びました。また、参加した高校生は、所属する学校やユネスコ協会だけでなく、グローバルフェスタやブロック研究会で報告を実施し、経験を共有しました。〔協力：公益財団法人かめのり財団〕



在カンボジア日本大使館訪問(隈丸優次前大使と)

- 「東日本大震災 教育復興支援レポート 2015」の発行
2015年度の東日本大震災子供支援募金事業の年次報告書を発行しました。



● 第3回 アクサ ユネスコ協会 減災教育プログラム

自然災害の多い日本において、今後起こりうる様々な自然災害に備えるため、東日本大震災の経験や教訓を全国の学校の防災教育につなげるプログラムを実施しています。減災(防災)教育に取り組む小・中・高等学校を対象に、活動助成、教員研修会、活動報告会を行っています。2016年9月19日～21日に助成校の教員を招聘し、東日本大震災の被災地・気仙沼市を訪問して、学校現場における大震災の教訓や経験を学ぶ教員研修会を開催しました。〔後援:文部科学省、協力:アクサ生命保険株式会社、プログラム・コーディネーター:及川幸彦氏(日本ユネスコ国内委員会委員)、教員研修会協力:気仙沼市教育委員会、気仙沼市立階上小学校・中学校、東京大学海洋アライアンス海洋教育促進研究センター、特定非営利活動法人 SEEDS Asia 後援:日本ユネスコ国内委員会〕



被災地での防災授業視察



被災校舎(震災遺構)視察



減災教育概論/ワークショップ

IV. 熊本地震子供募金

●熊本地震子供支援募金【緊急支援募金】

2016年4月14日に発生した熊本地震を受け、被災地域での教育の復興を支援するため、4月22日に「熊本地震子供支援募金」を立ち上げました。2017年1月末現在で、最大被災地の益城町・西原村をはじめ、12市町村約60校・児童育成クラブを対象に、備品・文具などの支援を行いました。また、被災地の子供のケアを行う大学生への支援も行い、熊本学園大学の学生ボランティアグループ「くまがく応援団スマイリア」による、西原村と益城町での運動遊びを主体とした活動を支援、また熊本保健科学大学ボランティアサークル Rideto による熊本市内8カ所の児童育成クラブで子供たちの不安を和らげるボランティア活動を支援しました。〔協力:熊本ユネスコ協会〕



支援例: 陥没した渡り廊下用のマット(益城町広安西小学校) (左) / くまがく応援団スマイリアの活動(右)

V. 世界寺子屋運動

●アフガニスタン寺子屋プロジェクト

アフガニスタンの多くの地域では、女性が学習できる機会が限られていますが、当連盟では、カブール県、パルワン県、バーミヤン県にて、民家型の識字教室の普及を通じて識字率の着実な向上に貢献しています。公民館的機能を持つ寺子屋ではコンピュータクラスや職業訓練(裁縫、革製品づくり、カーペットづくりなど)も行われており、多くの学習者でにぎわっています。また、識字クラス開始前には教育省識字局と共同で識字教員のための研修も実施しています。現在、525名が9ヵ月の識字クラスを受講しており、2017年3月に卒業予定です。また、カブール県北部のミルバチャコット郡では、アフガニスタン政府及び地域住民と協働で16軒目となる寺子屋(CLC: Community Learning Center)を建設しています。



識字教員のための研修を実施

●カンボジア・アンコール寺子屋プロジェクト

カンボジアのシェムリアップ州では現在、15 軒の寺子屋で、学校に行けなかった成人及び子供たちへの基礎教育、成人への職業訓練・収入向上活動、コミュニティの人々の手で持続的に寺子屋の運営を可能にするための人材育成の3点を柱としてプロジェクトを行っています。基礎教育では、15 歳以上の成人向けの識字クラスに女性を中心に約 500 人が学んでいます。小学校を中途退学した 10～16 歳の児童生徒への復学支援クラス約 230 人が参加し、公立中学校への進学を目指しています。小学校中途退学者や新たな非識字者をつくらないように、幼稚園クラスも実施し約 170 人の子供たちが参加しています。人材育成では、2016 年 12 月、寺子屋運営に関わる委員(ボランティアの住民)と、州や郡教育局担当官を対象とした研修会に約 70 人が参加しました。また、16 軒目となる新しい寺子屋の建設が 2016 年 10 月に始まり、2017年3月に開所式を予定しています。



小学校中途退学児童向けの復学支援クラス



夜間に行われる識字クラス

●世界寺子屋運動プロジェクト・現地職員招へい（9月6日～16日）

2016 年 9 月 6 日より 16 日まで、当協会連盟カンボジア事務所より、収入向上プログラム・チームのポック・ソバーン職員を招へいしました。来日中、九州 4 県（鹿児島・熊本・大分・長崎）のユネスコ協会・県教育委員会・学校・書きそんじハガキ・キャンペーン協力団体等を訪問し、活動報告や出前授業を行いました。また、アフガニスタン事務所のヤマ・フェロジ所長とアリ・レザ・ラヒミ職員が 2016 年 10 月 18 日から 25 日まで来日し、東北（秋田県・岩手県）のユネスコ協会や都内及び名古屋の協力団体やユネスコスクールを訪問し現地での活動について報告するとともに会員や市民・学生との交流を深めました。



大分県教育次長表敬訪問



熊本市立託麻南小学校での授業

●ネパール寺子屋プロジェクト

世界遺産の地、ネパールのルンビニにて、ネパール政府が実施した「識字ミッション」による識字クラスを修了した学習者の識字能力定着のため、4ヵ月間の識字後クラスを実施しています。2017年2月現在、約1,600名が継続識字クラスで学んでいて、約95%が女性学習者です。ネパール語の基本的な読み書きに加えて、公衆衛生や女性の権利についても学んでいます。また、中学校レベルで中途退学した生徒を対象としたクラスを試験的に開始しました。小学校クラスでは、約500名の子供たちが初等教育を受けています。さらに、ネパール政府からの要請に応え、ネパール地震で被害を受けたラメチャップ郡の寺子屋(CLC)の再建を進めるとともに、ルンビニでも新たに1軒の寺子屋を建設しています。



ラメチャップ郡の寺子屋 (CLC) の起工式

●ネパール大地震復興支援活動

ネパールの首都カトマンズ近郊の寺子屋のある4地域において2015年4月に発生したネパール中部地震の復興支援活動を行いました。建物被害を受けたチタポール寺子屋の再建をはじめ、被災家庭への亜鉛メッキシートの提供、地域の人々のための水の浄化研修、相談カウンセラーの研修、寺子屋でのカウンセリング、地域住民への減災教育の実施、寺子屋運営委員による行政手続きの支援(政府の見舞金獲得の手続き補助)など、被災児童への奨学金の支給を行いました。



ゲームを通じたストレスマネジメント



寺子屋での防災研修

●寺子屋ワークショップ

2017年1月25日より26日まで、アンコール寺子屋プロジェクトを実施しているカンボジアのシェムリアップにて、「寺子屋の自立と持続発展性」をテーマとした寺子屋ワークショップが開催されました。5カ国より合計41名の寺子屋関係者が集結し、お互いの活動を共有するとともに、寺子屋が自立発展していくためのアイデアなどを話し合いました。ワークショップにはリソースパーソンとして、岡山大学の大安氏と過去に協会連盟が支援していたインドのNGO・BIRDS代表のバルラヤ氏が出席し、支援終了後の寺子屋がどんな活動を展開し、継続運営を図っているのかなどが紹介されました。



チョンクニア CLC でのワークショップの様子

●書きそんじハガキ・キャンペーン 2017

株式会社電通の協力で、書きそんじハガキ応援キャラクター「書きそんじロー」に加えて「タンス遺産3兄弟」を用いて、ハガキ以外にも、未使用切手やプリペイドカードによる協力を呼びかけています。楽しく参加していただけるよう、「タンス遺産3兄弟」による映像や教材も制作し、ホームページ等で広報しました。139のユネスコ協会や約50校のユネスコールがキャンペーンに参加しています。〔協力:株式会社電通〕



書きそんじハガキ・キャンペーン 2017 啓発ポスター

VI. 一杯のスプーン支援活動

●アフガニスタン・ネパール

アフガニスタン・カブールにあるサハ診療所において、栄養補助食品や薬を提供、診療所の運営費も一部を支援しています。2016年度はネパール・ルンビニの寺子屋12軒で栄養不良の子供たちを対象に栄養補助食品を配布しました。同診療所では、毎月約8,000人が診断やリハビリを受けています。



栄養補助食品の提供（ネパール）



サハ診療所で診察を受ける女性（アフガニスタン）

●カンボジア「天空の杜プロジェクト」

カンボジアで、特に水事情の良くない地域の人々に安全な水を届けることを目的に2013年から3年間のプロジェクトを実施しました。2016年7月、全12回にわたって行ったシェムリアップ州の病院3か所と寺子屋15軒へのペットボトル水の輸送が完了しました。また、将来にわたって安全な水を現地に届けることを趣旨に、同じく7月からシェムリアップ州の寺子屋15軒で、識字・復学支援・幼稚園などの学習者を中心とした村の住民1,710人に対して衛生教育を行いました。〔協力：株式会社富山環境整備、日本郵船株式会社〕



寺子屋の幼稚園に通う子供たちへの手洗い指導



寺子屋での歯磨き講習会

VII. 世界遺産活動・未来遺産運動

●カンボジア・アンコール遺跡・バイヨン寺院彫像修復プロジェクト

日本政府アンコール遺跡救済チーム(JASA)の技術協力のもと、2012年より世界遺産アンコール遺跡群の1つであるバイヨン寺院のナーガ像、シンハ像の修復活動支援を行っています。カンボジア NGO (JST: アンコール遺跡の保全と周辺地域の持続的発展のための人材養成支援機構)と協力して開始した当プロジェクトでは、バイヨン寺院の外回廊にある彫像の修復や再設置と併せて、JASAの活動によって育成されてきた熟練のカンボジア人から若手のカンボジア人へ修復技術を伝承しました。2016年11月には、寺子屋の子供たち120人によるフィールドトリップを実施し、遺跡修復体験学習を行いました。



修復を手がけるカンボジア人スタッフ



遺跡の洗浄体験をするカンボジアの子供たち

●世界遺産年報

1995年から発行している「世界遺産年報」。本年はル・コルビュジエの建築作品を特集に、「世界遺産年報2017」を11,00部発行しました。全国の公共図書館、大学図書館、博物館、美術館、公民館、商工会議所、国際交流協会、ユネスコスクール等に対し、無償で配布しました。〔協力:財団法人日本宝くじ協会〕



●未来遺産運動 <プロジェクト未来遺産>

日本ユネスコ協会連盟では、失われつつある豊かな自然や文化を、100年後の子供たちに残そうとする地道な活動を「プロジェクト未来遺産」として登録しています。2016年12月7日(水)に未来遺産委員会を開催し、「プロジェクト未来遺産 2016」として下記5プロジェクトを登録しました。〔協力:日本ユネスコ国内委員会〕

プロジェクト名	団体名	団体所在地
町屋再生プロジェクト 市民基金設立による町屋の外観再生事業	むらかみ町屋再生 プロジェクト	新潟県村上市
玉川上水・分水網の保全活用プロジェクト	玉川上水ネット	東京都立川市
火の見櫓からまちづくり ～地域を見守る安全遺産を未来へつなぐ～	火の見櫓から まちづくりを考える会	静岡県沼津市
愛知万博の理念と成果の継承 ～海上の森・保全活用プロジェクト～	特定非営利活動法人 海上の森の会	愛知県瀬戸市
肥前浜宿の歴史的まちなみの保存と 醸造文化の継承	特定非営利活動法人 肥前浜宿水とまちなみの会	佐賀県鹿島市

●チームエナセーブ未来プロジェクト

住友ゴム工業との協働事業として4年目を迎えた本事業は、2016年度もプロジェクト未来遺産の8ヵ所にて社員による環境保護活動を実施しました。〔協力:住友ゴム工業株式会社〕



VIII. 民間ユネスコ運動の振興

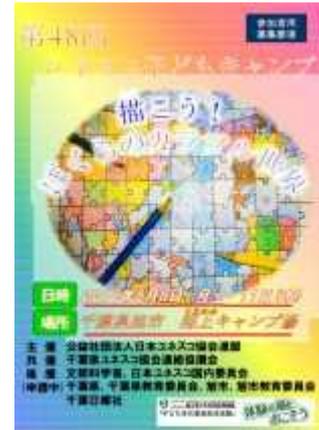
●ブロック別ユネスコ活動研究会

ユネスコ活動の質の向上を目指し、会員の研修の場として、下記のとおり全国9ブロック9ヵ所で同研究会を開催し、約1500名が参加しました。本年度は、全国共通テーマとして「会員の拡充」を掲げ、また、各研究会の中で、日ユ協連が実務担当者向けのセミナーも開催しました。

- | | |
|----------------------------|------------|
| 北海道: 2016年10月8日(土)～9日(日) | 北海道恵庭市 |
| 東北: 2016年10月1日(土)～2日(日) | 山形県酒田市 |
| 関東: 2016年9月3日(土)～4日(日) | 東京都渋谷区 |
| 中部東: 2016年9月3日(土)～4日(日) | 山梨県南都留郡忍野村 |
| 中部西: 2016年11月19日(土)～20日(日) | 愛知県名古屋市 |
| 近畿: 2016年10月15日(土) | 奈良県吉野郡吉野町 |
| 中国: 2016年12月10日(土)～11日(日) | 島根県大田市 |
| 四国: 2016年11月26日(土)～27日(日) | 愛媛県今治市 |
| 九州: 2016年12月3日(土) | 福岡県福岡市 |

●ユネスコ子どもキャンプ

2016年8月8日～11日まで千葉県旭市海上キャンプ場で、第48回ユネスコ子供キャンプが、「描こう！ぼくらのカラフル世界(ワールド)」をテーマに、109名の小中学生の子供たちと、60名の青年スタッフが参加し開催されました。本事業は、夏休み期間中、全国の小・中学生を対象に、野外での集団生活を通じて自然と共生する心や自立の精神を養い、互いの個性を認め合い、「心の中に平和のとりでを築く」ユネスコ精神を育むことを目的に、1969年から毎年開催されています。4日間のプログラムでは、テーマに基づいた様々なプログラムを子供たちは体験しました。〔後援：日本ユネスコ国内委員会〕



●2017年度青少年ユネスコ活動助成

①青少年へのユネスコ普及活動事業、②青年会員が中心となって行う社会的課題の解決等に資する事業、③ユネスコ協会とユネスコスクールの連携強化に資する事業の3つを対象に募集しています。

●世界遺産「白神山地」周辺地域での育樹活動

守ろう地球のたからもの事業として、2016年7月1日から2日にかけて三菱UFJフィナンシャル・グループの社員48名が参加して、下草刈りなどを行う育樹作業を行いました。世界遺産活動特別大使犬ワンバサダーわさおも応援にかけつけ、日ユ協連からは野口昇理事長が参加しました。〔協力：三菱UFJフィナンシャル・グループ 後援：日本ユネスコ国内委員会〕

●国際協力フェスタへの出展

全国3カ所(東京、名古屋、大阪)で開催された国際協力フェスタに地域の青年会員による実行委員会が中心になり、出展をし、世界寺子屋運動を紹介しました。

Ⅷ. 国際交流事業

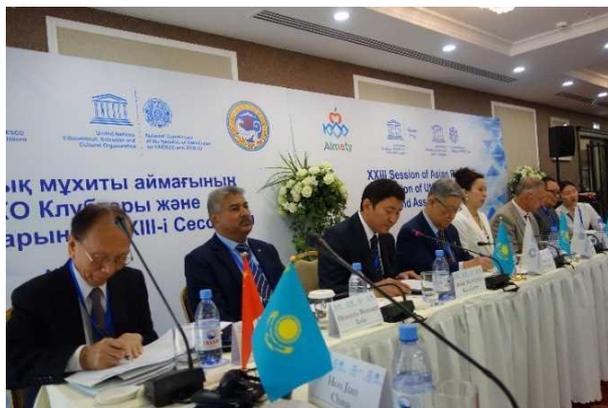
●アジア太平洋ユネスコ協会クラブ連盟(AFUCA)執行委員会

2016年9月5日から7日までカザフスタンのアルマトウイでAFUCA執行委員会が開催されました。その際、4年に一度の役員選挙及び定款改定も行われ、新執行役員が承認されました。

会長：ボラット・アクチュラコフ氏(カザフスタン)

副会長：宋立军氏(中国)、マハブブディン・チョードリー氏(バングラデシュ)

事務局長：野口昇理事長(日本ユネスコ協会連盟理事長)



カザフスタンでのAFUCA執行委員会

●世界ユネスコ協会クラブ・センター連盟(WFUCA)

WFUCA 事務局が第 38 回執行委員会の開催について UNESCO 本部に PP 申請を行い、助成が決定した。執行委員会は文化の和解と民間ユネスコ運動をテーマとしたオープンフォーラムと併せて、2017 年7月 14 日に東京(国連大学)で開催します。会議参加者は 2017 年7月 15 日から始まる「第 73 回日本ユネスコ運動全国大会 in 仙台」にも参加する予定です。

●三菱アジア子ども絵日記フェスタ

1990 年の国際識字者年より絵と文字で相互理解を深めることを目的に、多くの国において、当該国の教育省やユネスコ国内委員会の協力を得て実施してきました。12 回目となる今回は「伝えたいな、私の生活」をテーマとし、本年4月の国際選考会において、参加 24 ヶ国(1地域含む)のグランプリ、三菱広報委員会賞、AFUCA 賞、日本ユネスコ協会連盟賞が決定しました。2016 年7月 27 日には、横浜にて各国・地域から選ばれたグランプリ受賞者を招聘し、国際表彰式が実施されました。〔主催：三菱広報委員会、アジア太平洋ユネスコ協会クラブ連盟、日本ユネスコ協会連盟 後援：日本ユネスコ国内委員会〕



横浜での国際表彰式

●日中韓青年文化フェスティバル

日本、中国、韓国のユネスコ協会クラブ連盟の共催で、3国から約 40 名の高校生が集い、持続可能な地球社会の在り方について議論を深める交流事業を7月 25 日～27 日に韓国で開催しました。「気候変動と地球の未来」をテーマに意見を交わし合い、国境を超えた友情を育みました。日本からは、北海道登別明日中等教育学校、東京都立三田高等学校、大阪府立松原高等学校、大阪府立春日高等学校、コリア国際学園、帝塚山学院泉ヶ丘中学校高等学校の計6校から 15 名が参加しました。



韓国の世界遺産「昌徳宮」の前で

X. UNESCO との連携

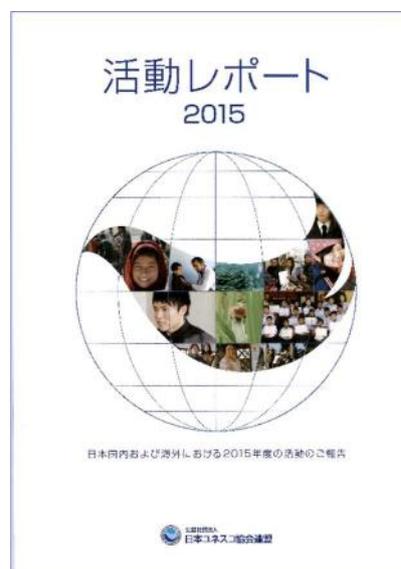
● UNESCO パリ本部とのパートナーシップ協定

2012年 UNESCO 本部と日本ユネスコ協会連盟が締結した UNESCO パートナーシップ協定により、日本国内の企業・団体・個人からの支援によって UNESCO のプログラムを支援する枠組みができました。2013年9月より ANA が UNESCO 公式サポーターとなり、本年も継続して、マイレージプログラムを通じた寄附や機内誌「翼の王国」や機内映像でユネスコ活動を紹介するなど、啓発活動を行いました。〔協力:全日本空輸株式会社〕

XI. 普及広報活動

● 「活動レポート 2015」の発行

2015年度のユネスコ活動の年次報告書を発行し、全国の募金者、協力者に配布しました。



● 日ユ協連ホームページでの活動ニュースやブログ等を通じた定期的な情報発信をしました。



●フェイスブックでの情報発信

フェイスブックでは、世界寺子屋運動、世界遺産活動、東日本大震災の支援地の情報、トピックスなどをいち早く発信し、多くの方との情報共有を図っています。

登録者は、2017年2月13日時点で3,112名。

<http://www.facebook.com/unesco.or.jp>



●機関誌「ユネスコ」の発行

2016年7月号、10月号、2017年1月号を発行しました。



●ユネスコ情報マガジン(メール配信)の発行

第216～223号を発行しました。読者数は2017年2月13日現在5,775件。